

# 觉悟の時代に

# 分断に向き合う

敵と味方、人と人の彼我を分けてしまう分断や差別。歴史に学びながらなくそうとしてきた悲しみを、今も人類は繰り返したり続けたりしている。私たちは現実が見えているのか、何に向かえていないのか。

——現在の国際情勢は、二つの世界大戦の間の「戦間期」に似ているともいわれます。  
「今のロシアを、戦間期ドイツのワイメル共和国と重ねる見方は多いですね。巨大な国家が解体した後に帝国意識が残存したという点、いつたん経済的に破綻しかかったという点で共通しています。ワイメルは1920年代にハイパーインフレと大恐慌を経験し、ナチスが台頭しました。ロシアも90年代に経済的に大きく混乱し、その後ブーチン氏が強大な権力を握りました」

「もちろん戦間期と現代で、全体の状況は大きく違います。その中で、あえて現在と似ている点を探すとすれば、大きな戦争後の秩序構築に失敗したこと、社会が極度に分断されていることです」

——「秩序構築の失敗」とは、り広げた第一次世界大戦は、世界に大きな傷痕を残しました。その戦後の秩序構築が、戦間期の20年間の課題でした。冷戦終結後30年間も、大きな『戦争』の後の秩序構築という側面がある点では似ています

——しかし、戦間期の秩序構築は失敗でした。第一次大戦後に成立したベルサイユ体制やワシントン体制は、勝者側の論理で作られた国際秩序でした。やがて、ドイツ、イタリア、日本のような現状打破を目指す国への挑戦を受けることになった

——冷戦終結の後はどうだったのでしょうか。

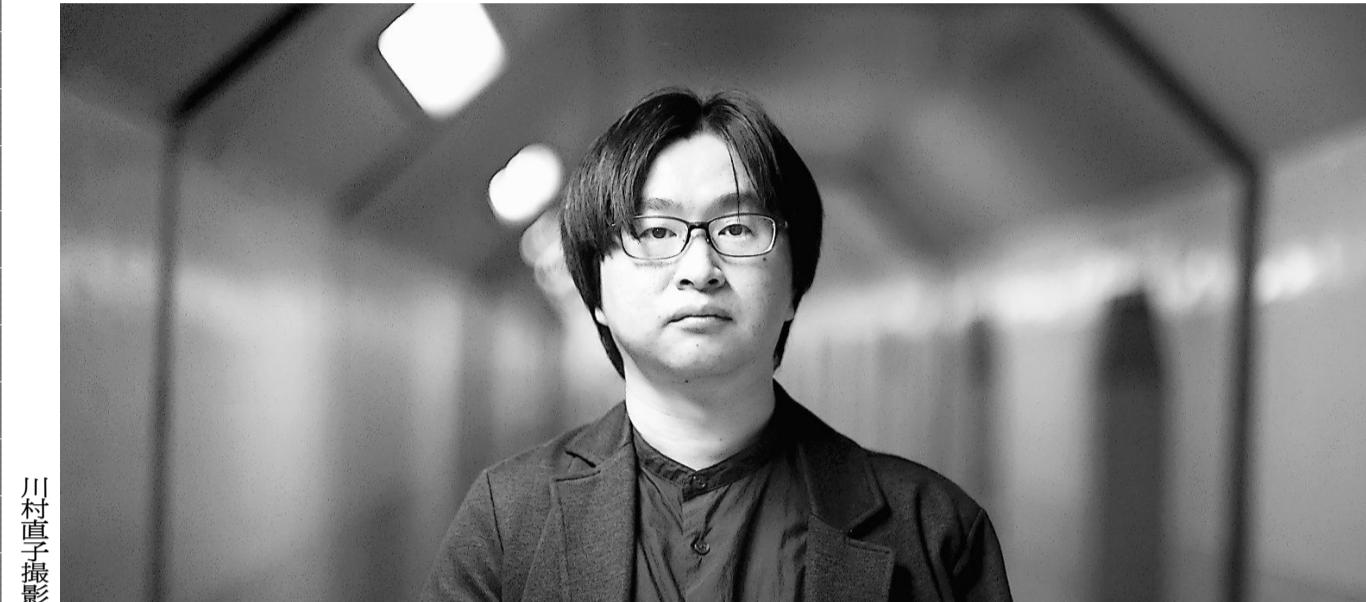
「米国の歴史家サロッティは、冷戦後の欧州の秩序は『ブレハブ構造』だと指摘しています。NATO・北大西洋条約機構などの西側の秩序は、冷戦のためにつられたものであります。冷戦終結後、根本的に替えてもらつたはずですが、実際にできたのは西側の秩序を建て増したブレハブでした。基本的な構造は変わらぬまま、NATOとEUが東に拡大していく」

——「旧社会主義国の人々を、冷戦に負けたという屈辱感なしにどうやつて国際社会に包摂するか。90年代に模索は重ねられましたが、うまくいかなかつた。その反動としてブーチン氏のような人が出てきた。冷戦後の秩序構築の失敗の結果として、今回のロシア・ウクライナ戦争を捉えることもできるかもしれません」

——「旧東には『屈辱感』が残ってしまったのですか。」

——「ドイツを研究していると、いまだに東西分断の傷痕を感じます。ドイツは典型的なブレハブ国家で、西の憲法秩序、政治や経済制度をそのまま東に移植しました。そのため、社会に様々なひずみが出た。ベルリンの壁崩壊30周年に行われた調査では、旧東地域に住んでいた住民の57%が自分たちは2級市民だと感じています」

——「今回の戦争についての世論調査でも、旧西独と東独で傾向が明確に違います。旧西独には、ウクライナ



政治学者

1978年生まれ。東京大学教授。専門は国際政治史、欧州政治史。著書に『分断の克服 1989-1990』(大佛次郎論壇賞)など。

川村直子撮影

# 不安が人を右傾化させる敗者取り残さぬ秩序を

——社会の分断については、どこが共通しているのですか。

「ワイメル期のドーリツは、労働者、保守層、カトリックなどに分断され、支持政党も読む新聞も違っていました。主流のメディアがなかなか西側にも悪いところがあつた感じで、感じてしまうのでしょうか」

——社会の分断については、どこ

が共通しているのですか。

「ワイメル期のドーリツは、労働者、保守層、カトリックなどに分断され、支持政党も読む新聞も違っていました。主流のメディアがなかなか西側にも悪いところがあつた感じで、感じてしまうのでしょうか」

——社会の分断については、どこ

が共通しているのですか。

「不安を引き立てる人が急進派に走るのは、現代と同じです。ただ、ナチスが激増したことです。ただ、ナチスの得票率を見ると、むしろ失業者が少ないので高かつた。ナチスを支持したのは、実際に失業した労働者よりも中産階級でした。明日は我が身かもしれないという中間層の不安を、ナチスは巧みに利用したのです」

——「不安の暴走」を防ぐには、何が重要ですか。

「権力者とメディアの責任は大きいです。分断と同様に、不安もただちに対立につながるわけではありません。権力者が自由民主主義のルールを順守し、対立をおおるゲー

——「不安の暴走」を防ぐには、何が重要ですか。